★炎に包まれたアメリカの奇妙な事件＝ゴードン・ダフ

１０年以上にわたって、世界には暴動ではない暴動があった。独立広場（ウクライナの親ロ政権を崩壊させた人民蜂起がおきた場所）、香港、トリポリ、カイロ、そしてパリ、ボストンでのテロ攻撃などだ。

いまアメリカが炎に包まれている。

ここに共通点があるのだろうか。ウクライナがCIA計画によって打倒されたことや、アラブの春、失敗したもののシリアでの一連の偽革命が繰り広げられたことを理解するのはそう難しいことではない。

これまで世界（各地）をひっくり返した人々はいま、「再び」とはいえ国内に向かって、オーウェル的な悪夢の政治分析にアメリカを一歩前進させる準備を整えている。その悪夢は2016年の選挙後に予測されていた。

ツールは9/11後の世界で磨かれ、偽の戦争、偽のテロリズム、盗まれた何兆もの富によって助長され、アメリカの安全保障官僚機構によって動かされている。そこではアメリカの投獄者の数と同じ２００万人のアメリカ人が雇われている。

国家の中の国家といわれるアメリカの暗黒の心臓部はどこにあるのだろうか。

アメリカが、アリゾナ州フォート・フアチューカにある米陸軍諜報学校で長年培ってきた知識と経験から恩恵を受けるときがきた。ここはウクライナの独立広場と香港を計画した人々が訓練を受けていた所だ。

私たちは今、同じ人物がパトカーを燃やし、不思議なほど身ぎれいにしたグループを率いているのを目の当たりにしている。12か所の都市の暴徒はほとんどが白人で、物語は常に同じだ。アフリカ系アメリカ人による平和的な抗議デモがあるとその後にすぐ対抗するデモ隊が現れ、放火と略奪が始まる。予定どおりにそうなるのだ。

暴徒だって？　彼らは白人だが、それ以上のものだ。いままで何度も見たものの繰り返しであり、1963年のダラスや今日の香港の街もそうだったのかもしれない。

この街頭劇場の役者たちはいったい何者なのか？

◇米陸軍特殊部隊/陸軍諜報機関
◇ブラックキューブなどの諜報請負業者や、傭兵社会の「王様」デヴォス・プリンスと結びついたグループ
◇諜報警察と FBI（米連邦捜査局）ワシントン事務所員たち
◇ワシントンの保守系シンクタンクから資金提供を受けた政治工作員

「フラッシュモブ（突発暴徒）」を採用し、ソーシャルメディアを使って都市戦争を指揮する科学は、米陸軍の専門分野だ。実際、これは、アメリカが好んで使う現代の戦争、暴動やテロリスト、標的を絞った殺害や黒宣伝の方法なのだ。

それが今、ことし大統領選挙をむかえるアメリカにむけられている。世論調査では現大統領が 2 桁のリードを許し、（パンデミックへの）対応の遅れから、当然ながら米国史上最大の災害の責任があると非難されている。

軍、CIA、警察などが協力してアメリカを破壊する活動しているトランプの政策は何なのか？大規模な金持ち減税なのか。あるいはパンデミックの管理ミスによる人口減少なのか。国がどれほど正気を失い不条理になっても、イスラエルを擁護していくのか。

いっそう邪悪な理由があるのか、あるいは問題なのか？

グラウンド・ゼロ、ミネアオリス

殺害されたジョージ・フロイド氏はヌエベオ・ロデオ・ナイトクラブの警備員だった。殺害した数人の警察官のなか一人デレク・ショービンはフロイド氏の長年の同僚 だったとされるが、この事件によって市民による「系統的な」抗議が引き起こされたと一般に考えられている。

しかし、これには「系統的」なものはなにもない。フロイド氏と彼を殺した者たち、そのなかの 1 人が、彼が個人的によく知っていた人物だったことは奇妙な偶然ではない。メディアが明らかにしてすぐ隠されてしまった。まさに命令されたかのように。

数週間前に戻ろう。アメリカ人は（コロナ禍で）死にかけていた。その時の死者はまだ数万人で、これを書いている時点の十万人を超える数ではなかった。暴徒はランシングにあるミシガン州議会議事堂を襲撃した。武器をもち、その中には大容量の弾倉を備えた自動小銃があり、彼らはそれらを携行して議事堂内にはいり、（経済活動を再開させろと）議員たちを脅迫した。

警察は何もしなかった。

諸組織が関与していた。パンデミックにもかかわらず、彼らは州をまたいで公然と活動し、同じトラックや車を運転し、何千マイルも移動した。推察どおり、これらは違法なのに警察は何もしなかった。

もちろん、これらの組織はベッツィ・デヴォス米教育長官から資金提供されていた。彼女の兄、エリック・プリンスは世界中で十数の紛争の背後にいると疑われている人物である。

（注）ベッツィ・デヴォス米教育長官は、公教育の民営化推進運動のリーダー。兄のエリックは元海軍人で米の代表的な軍事請負会社ブラックウォーター創業者。米軍の下請け機関として世界中で活動している（ウィキペディアから）。

その後、政府庁舎に兵器を公然と持ち込んでいた人々の多くが、有罪判決や家庭内暴力の問題で武器の所有や投票さえも法的に禁じられていることが判明した。しかし警察は何もしなかった。

いま警察は、特に数十の都市での平和的な抗議デモにたいして、あらゆることを行っている。デモが平和的であるほど、警察は暴力的になっている。

待てよ。またしてもだ。同じ人物たちが現れ、頭を高くタイトに刈り込んだ軍人ヘアスタイルで火炎瓶やコンクリートの塊を投げている。ドナルド・トランプが5月30日（土）のツイートで形容したように、軍隊化した警察が暴力に訴えて「凶悪な犬」と「不吉な武器」を解き放ったのだ。（人種差別に）抗議するデモ隊が平和を保てるはずがない。

それから、ソーシャルメディアに動員された郊外にすむ白人の10代の若者たちの部隊がいた。すべてのビデオが示している。そして、抗議を平和に保とうとしている人以外は誰も質問をしない。なぜ彼らはここにいるのか。

その答えも簡単だ。CIAと米陸軍が「社会的影響者」を使って暴力的な事件を上演しているのだ。 CIAと陸軍諜報機関は、10代の白人が好きだ。彼らは特権意識と不満をあわせもった子供たちで、いとも簡単に暴力に導かれるからだ。

みなさんはビデオゲームが何のために使われると思いだろうか。

（暴動を）組織化し「解き放つ」際に使用される特殊なソフトウェアは、政治団体が使っている同じソフトウェアの修正版で、地球のすべての国の地図を作り、何十万人もの主要な「影響力者」を特定している。彼らは「特別の教材」で養成され、プロ中のプロとして給与も支払われている。

どの国にも、その下には何百万人もの人がいる。アメリカは存在を否定するが、彼らはAI（人工知能）でプロフィールが登録されており、一部の者は「有用」とされ、その他は逮捕またはさらに悪い対象にされている。

私はこれらのプログラムに携わり、ソフトウェアを持っている。エジプトではそれが実際に使われるのを直接みた。他の国でも同じように、すべての地区の分厚い地図が作られている。階層わけ、分類され特定された人は数千ではなく数百万だ。

データの背後には計画と機能があり、そのような計画と機能は非常に多くの国に存在している。いまわれわれが米国内で目のあたりにしている能力を展開している犯罪集団は実は米国政府である。

米国で米陸軍のためにこの計画と能力を行う組織は、グーグル・アイデアグループ/ グーグル・ジグソーであり、Facebookや一連のテクノロジー企業と協力している。指揮しているのは元ホワイトハウスの安全保障担当顧問のレッド・コーエン氏である。

彼は、グーグルの従業員として、ソーシャルメディアを使った不規則戦争を米陸軍に教えている。またこの特定の主題についてウェストポイント（陸軍士官学校）で定期的に講演している。

結論

私たちは、諜報機関、民間または軍、あるいは政治的、つまり「グローバリスト」を意味する組織を主な行為者として特定した。また、すべてのイベントが監視され、悪用されていると想定しても間違いないだろう。実際そうであることを知っている。ではほとんどまたはすべてではないにしろ、多くの「行為」が計画されたものであると想定できるだろうか？

人は次に、「誰にメリットがあるか」で始まるプロセスを開始する。「テロリスト」または「自由を求める人」という答えはめったにない。答えは必ず、「通常の容疑者」になる。ただし、彼らは名指しされたり、非難されたり、統治されたりすることはなく、調査さえされない。

彼らはアメリカ合衆国上院を所有しており、司法長官でと最高裁判所の 9 人の判事のうち 5 人をコントロールしている。常に銃と監獄を管理している。プレスを制御し、もちろんインターネットも管理している。実際にはインターネットを所有している。そこが彼らの運動場であり、ツールなのだ。

次に、自由を求める人類の真の願望はどうだろう。しかし、そのような存在があったとしても、それを腐敗させ破壊する機能が、グーグルがグーグルたるゆえんなのだ。

蓄積ができるそういうツールを使って世界中を見回すとしたらどうだろう。それらはすべてインターネットを伴い、フィルター処理され、捻じ曲げられ、検閲され、からお世辞でシードされる。どのような純粋な心を見つけることができるだろうか。（了）

そのようなものがあったら、フェイスブックは禁止するだろう。グーグルはリストから除外するだろう。ユーチューブは検閲するだろう。メディアはテロリストと呼ばわりし、アメリカはドローンを放って攻撃するだろう。

アメリカの路上で何千人もの人々が命をかけてたたかっているのは軍事化された悪質な警察であり、その警察はずっと以前からグローバリズムの集団と同盟していた。

警察を軍隊から、スパイ機関から、あるいは実際には犯罪者から分離するような境界線はないのだ。この 20 年間、米軍の主な目標は、世界中に警察国家の統制と完全な監視、全面的な制御と操作が存在する世界的な風潮を作り出すことだった。

世界の「産業界」がそれを要求している。そしていま、ここ米国に、リビア、シリア、ウクライナに対して使用されたトリックが里帰りしてきた。

ゴードン・ダフ＝ベトナム戦争に従軍した元海兵隊員。帰還兵や米人捕虜問題にたずさわり、安全保障問題で政府に助言もした。帰還兵の雑誌「ベテランズ・ツデー」理事長兼上級編集者を務める。